



SONY  
CLASSICAL

SICC 30266-7 / STEREO  
© & © 2015 Sony Music Entertainment Italy S.p.A.  
Manufactured by Sony Music Labels Inc. Made in Japan. ® is a Registered Trademark of Sony Corporation.  
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.



ORCHESTRA SINFONICA  
NAZIONALE DELLA RAI

ANDREA  
BACCHETTI



# JOHANN SEBASTIAN BACH

KEYBOARD CONCERTOS  
BWV 1052-1056 & BWV 1058

# J.S.バッハ

Johann Sebastian Bach (1685 - 1750)



## DISC 1 71:29

### ピアノ協奏曲 第1番 二短調 BWV1052 21:42

Keyboard Concerto No. 1 in D Minor, BWV 1052

①	I. Allegro	7:27
②	II. Adagio	6:24
③	III. Allegro	7:50

### ピアノ協奏曲 第2番 木長調 BWV1053 20:36

Keyboard Concerto No. 2 in E Major, BWV 1053

④	I. Allegro	8:27
⑤	II. Siciliano	5:27
⑥	III. Allegro	6:42

### ピアノ協奏曲 第3番 二長調 BWV1054 15:35

Keyboard Concerto No. 3 in D Major, BWV 1054

⑦	I. Allegro	7:22
⑧	II. Adagio e piano sempre	5:37
⑨	III. Allegro	2:34

### ピアノ協奏曲 第4番 イ長調 BWV1055 13:35

Keyboard Concerto No. 4 in A Major, BWV 1055

⑩	I. Allegro	3:56
⑪	II. Larghetto	5:07
⑫	III. Allegro ma non tanto	4:30

### RAI国立交響楽団(弦楽アンサンブル)

ORCHESTRA SINFONICA NAZIONALE DELLA RAI, strings

### アンドレア・バッケッティ(ピアノ&指揮)

ANDREA BACCHETTI, piano & conductor

使用ピアノ: Steinway Model D 440230

[録音]2014年7月30日&31日、イタリア、トリノRAIオーディトリアム  
[レコーディング・エンジニア]アントニオ・ヴェルテリ



### Instrument

Steinway grand piano  
model D - 440230

Piano Technician  
Francesco Pelati

### Recording

Turin Rai Auditorium  
July 30<sup>th</sup>-31<sup>st</sup> 2014

Recording Engineer  
Antonio Verderi

Executive Producers  
Luciano Rebeggiani  
Mario Marcarini

### Texts

Mario Marcarini

### Photos

Marco Manarini (A. Bacchetti)  
Laura Casale (A. Bacchetti)  
+piùluce (Rai Orchestra)

# 際立つボリフォニー、自然で甘美な歌いくち～バッケッティのバッハ鍵盤楽器協奏曲集

## 山崎浩太郎

軽快で心地よい演奏をきかせてくれるイタリアのピアニスト、バッケッティのバッハ録音シリーズ。今回は鍵盤楽器のための協奏曲集である。

ピアノ協奏曲というジャンルは、モーツアルト、ベートーヴェンから現代にいたるまで、オーケストラ演奏会における、重要なレパートリーとなっている。その原型の、チェンバロを独奏とする協奏曲は、ヨハン・セバスティアン・バッハによってほぼ始められたといつても、過言ではない。発明者とまでは特定できないにしても、それまではオーケストラの通奏低音を担当する、地味な伴奏楽器だったチェンバロに、独奏楽器としての地位を与えた最初期の音楽家のひとりがバッハであることは、間違いない。

ただし、初めからチェンバロを独奏楽器に想定したものではなく、ヴァイオリン、オーボエ、オーボエ・ダモーレなどのために書いた作品を、のちに転用したと考えられている。このことは、協奏曲の独奏楽器としての鍵盤楽器が、発展途上にあったことを示している。音量に限界のあるチェンバロでは、オーケストラのなかで存在感を際立たせることが難しい。たとえ、ごく小編成の弦楽

合奏との共演でも困難がつきまとう。バッハの先輩、同輩の作曲家がこのジャンルに手を染めなかったのはそのためだろうし、バッハにしても、他の楽器のための旧作を再利用したにすぎなかつた。

バッハの鍵盤楽器のための協奏曲の録音が、近年になっても、チェンバロよりもピアノのほうが多いように感じられるのは、おそらくこの問題によるものだろう。実演と違って録音では、マイク操作などで独奏を強調することも可能だが、それでも限界がある。アンドレアス・シュタイナーが「ライブルク・パロック・オーケストラと共に演奏した『ハルモニア・ムンディ』(2013年録音)などは、さすがにシュタイナーとうならせる独奏をきかせてくれたけれども、やはり響きの単調さをまぬがれることは難しかった。

しかし現代のピアノなら、音量と響きはフル・オーケストラに対抗できるほどだし、強弱の変化など、より多彩な表現が可能だ。バッハのチェンバロのための独奏曲をピアノでひくというのは、ある種の「抽象化」だと私は考えるが、協奏曲の場合は、より積極的な、より創造的な意味あいを

帶びてくる。

ここでのバッケッティが、いつものファツィオリではなくスタイルを用いているのは、いかなる理由なのか不明だが、弦楽オーケストラとの共演のために、より明確で歯切れのいい、硬質の響きを求めるのではないだろうか。各曲の両端楽章でのリズムの弾力、右手と左手のボリュームの強弱などを際立たせる上で、この選択は確かな効果を発揮している。一方、バッケッティの長所である、緩徐楽章での自然で甘美な歌いくちも、しっかりと保たれている。

なお、ここでは指揮も兼ねているが、これについては、録音直前の2014年7月9日に、東京で私が「レコード芸術」のために行なったインタビューで、「指揮もされるのですか? これまで経験がありますか?」という質問に対し、こんなことを語ってくれていた。

「メンデルスゾーンの協奏曲を録音したことがあります。ただ、指揮者としてはあまり才能がありません。できるだけやらないようにしていますが、バッハの場合は指揮者なしが今はスタンダードになっているので。

といってもバッハでは曲のあいだ、ずっとピアノをひいていることになるので、指揮できるところは

わずかなんです。それ以上やると楽員からクレームがきますよ。みんなで気持ちよく演奏することがいちばん大切ですから、そのためには自分がやらないほうがいいんです(笑)。」

(「レコード芸術」2015年2月号より)

いかにもこの人らしい謙遜だが、指示を最小限にとどめて、気持ちよく合奏することの大切さは、この録音にもうかがうことができる。

そしてこのインタビューでは、その後9月にゴールドベルク変奏曲を録音する予定だと語っていた。すでに3種の録音と映像を世に出しているバッケッティの、反復なしとありの、4つめと5つめの録音。これも、今から楽しみである。

[2016/04/15]

## ヨハン・セバстьян・バッハによる鍵盤楽器用協奏曲

マリオ・マルカリーニ

近年になって、独奏チェンバロと弦楽合奏、通奏低音のための素晴らしい曲がいくつも再発見され、校訂され、あるいは(例えばオッタヴィオ・ダントーネのようなチェンバリスト／指揮者や音楽学者の尽力で)復元され、そして演奏されている。その事実は、それらの曲はいずれもアレッサンドロ・スカルラッティが活躍した17世紀から18世紀にかけてのナポリに直接の起源を持っており、またある程度の確証をもってスカルラッティその人の作品とされていることから、従来言われてきた、ヨーロッパにおける独奏鍵盤楽器と管弦楽のための協奏曲という近代的な楽曲形式の「発明者」として考えられる作曲家はバッハしかおらず、そのことに論争の余地はないとする説がかなり危うい領域にある可能性を示唆していると言つていい。だがそのことを事実として受け入れたとしても、現代の学者の中に、体系づけの大家にして形式と類型の注意深い作り手であるこのドイツの巨匠の業績についての疑問を広めようとする者はひとりもいないだろうし、それどころか、彼に先立つ作品——この場合はイタリアの作品——についてバッハが持っていた知識の深さは、いかにこの作曲家が、既知のものとは全

く異なる多種多様な音楽体験を、古いものも同時代のものも含めて、大事に扱うことができたかを証明しており、また、それらの音楽体験を通過し、吸収する彼の能力、さらには明文化されてこそないがよく知られていたルール——18世紀に、アイデアや意見の、そしてもちろん芸術の自由な流通という点でたぶんその後は二度と届くことのなかった高みに到達していた文化的コスモポリタニズムの一部をなしていたルール——に従って絶対的な傑作に変形させる彼の能力の高さを示していると言えるだろう。ヴァイマルのオルガン奏者および楽師長(コンツェルトマイスター)として雇われていた時期(1708～1717)に、イタリアをはじめとする様々な国のスコアに触れる機会のあったバッハは、それを研究し、またよく知られているように、まず独奏チェンバロ用に編曲した。それらのスコアはアントニオ・ヴィヴァルディ、それからアレッサンドロ・マルチエッロとベネデット・マルチエッロの兄弟によるコンチェルトで、それらがバッハの驚くべき力量と熟練の技によって変形され、作り変えられたのである。続くケーテン時代(1717～1723)になると、バッハは協奏曲様式による作品も作曲するようになった。当時のド

イツで確立されつつあったこのジャンルの中で、バッハは、イタリア的な妙技と旋律好みに、厳格な形式と北欧的なボリフォニーの知識とを見事な形で融合させる術を熟知していた。この時期に書かれた6曲の《プランデンブルク協奏曲》とともに、バッハはあの時代の最も進歩的で前衛的な傾向のヨーロッパ的な総合と言えそうな形式的なモデルを文字通りに創り上げたのだった。

1723年から始まるライプツィヒ時代の最初の数年間のバッハの主要な職務は、何と言っても、ライプツィヒ市内の聖トーマス教会のカントル(合唱長)すなわちトーマスカントルとしての教会音楽、典礼音楽の作曲であった。だが、1729年、そんなトーマスカントル、バッハのもとに、ライプツィヒのコレギウム・ムジクムの監督就任の申し出が舞い込み、バッハはそれを受け入れた。テレマンが1702年に創設したコレギウム・ムジクムは職業音楽家とアマチュア音楽家、音楽愛好家からなる演奏団体で、有名なカフェ・ツインマーマンをはじめとするライプツィヒ市内のコーヒー店で毎週、世俗音楽を演奏していた。こうしてバッハは、コレギウム・ムジクムでの頻繁な演奏機会と、教義の高い聴衆、傑出した中流階級の擁護者たちを得たことによって、《プランデンブルク協奏曲》など、それまでに作曲してきた器楽レパートリーの大部を披露する機会を手に入れることになった。そ

こでは旧作だけでなく新作も演奏され、その中には、独奏鍵盤楽器と器楽アンサンブルのための協奏曲——多くは、他の独奏楽器のための既存の作品をもとに、バッハ自身の息子たちをも含むとりわけ優秀な弟子たちに演奏させるために、巧みに書き換えたと思われる——も含まれていた。ここで注意しなければならないのは、バッハが鍵盤楽器用協奏曲の土台としたオリジナルの曲は、そのほとんどが失われてしまっているということである。従って、バッハの鍵盤楽器用協奏曲は、それぞれが音楽的な重要性を持っているのは当然のこととして、それ以外に資料としても非常に重要な価値を持っている。ここではその点に注目しながら述べていこう。

周囲の様々な状況に助けられながらこのような創作活動を続けたヨハン・セバстьян・バッハは、チェンバロが絶対的な主役を務める14曲もの協奏曲(そのうち、BWV1059は断片しか残っていない)を後世に伝えた。断片を除いた13曲のうち、独奏鍵盤楽器が1台だけのものが7曲(BWV1052～1058)、2台の鍵盤楽器のための協奏曲が3曲(BWV1060～1062)、3台の楽器を使う三重協奏曲が2曲(BWV1063と1064)あり、そして有名なBWV1065(ヴィヴァルディの4つのヴァイオリンのための協奏曲が原曲)では4人のソリストが登場する。

今日、BWV1052～1059の総目録番号で知られている独奏チェンバロのための協奏曲については、中心となる原典資料にあたることができる。バッハの自筆絃譜が残っており、ベルリン国立図書館に保管されているのである。それらの自筆譜を見ると、これらの協奏曲がひとまとまりのものであることがはっきりと分かる。バッハによる何か所もの修正や考え方の痕跡以外に、BWV1052～1057の6つの協奏曲の楽譜には、それらがひとまとまりの曲集であることを証明するかのように、もなく、冒頭には「JJ (Jesu Juva)」(イエスよ、助けたまえ)、最後には「Finis. S.D.GI. (Soli Deo Gloria)」(完了、ただ神にのみ栄光を)という言葉が書き添えられているのである。それに対して、スコアが終わったところに何も書き込まれていないBWV1058と断片のBWV1059は、6曲のグループからは除外されているように見えるが、それはグループから単純に除外されたか、あるいは未完に終わったもう1つの曲集に含まれることを示すためのものだったかもしれない。音楽学の成果によると、きわめて貴重な資料であるこれらの自筆絃譜は1733年から1746年の間に作成された。バッハの仕事ではよく見られことだが、これら6つの協奏曲——普通はこの6曲セットで单一の作品とみなされている——のインスピレーションの源泉はきわめて

多岐にわたり(すでに述べたように、コスマボリターン文化的土台ゆえに、バッハはイタリア、フランス、そしてもちろんドイツの音楽とそのスコアに触れることが可能だった)、それらをバッハは巧みに組み合わせながら、全音楽史を通じても滅多に見ないほどの抜群の対位法の能力を駆使して、扱った。

こうして、**協奏曲第1番 (BWV1052)**では、3つの楽章(アレグローアダージョーアレグロ)を通じて名人芸と厳格さのスリリングな対照が見られることとなった。ちなみに、1つのヴァイオリンのための協奏曲を原曲とすると思われるこのBWV1052には、1720年代に書かれた複数の教会カンタータと共に主題素材も使われている。それと同じように、**協奏曲第2番 (BWV1053)**でのソリストの華やかな聴かせどころの多くも、1726年に書かれた2つのカンタータ(BWV49とBWV169)に負っている。第2番には第1番ほどの厳しい雰囲気ではなく、中間楽章ではチェンバロが豊かに装飾されたくつろい旋律を織りなす。華やかな最後の第3楽章でも、弦の伴奏の上でソリストが大活躍する。

次の**協奏曲第3番 (BWV1054)**の、よく知られた荘重な導入部は、姉妹作であるBWV1042(ヴァイオリン、弦、通奏低音のための協奏曲)の遊びやかさとやや大言壯語的な詩情を思い出

させる。型通りの2つの急速楽章を持ち、中間楽章「アダージョ・エ・ピアノ・セントラル」にはメランコリックで思いに沈んだ美しさがある。

**協奏曲第4番 (BWV1055)**は、どういうわけか、このシリーズの中では知名度が低く、演奏頻度も少ない方だが、どこを取っても、他の作品の最も有名な部分と比べて劣っているわけではない。この協奏曲は、長い間、他の作品からの改作ではなく、最初からこの形で書かれたものと考えられてきたが、最近の音楽学的研究によって、そのインスピレーションの源泉は失われたオーボエ協奏曲ではないかという仮説が立てられている。

6曲の中で最も感動的な1つである**協奏曲第5番 (BWV1056)**は、華やかな楽章でも思いにふけったようなテンポを採用していることを特色としている一方、有名な「ラルゴ」(カンタータ第156番導入部のシンフォニアから取られている)では、清らかさと痛切なメランコリーに身を任せせる。この楽章ではソリストは右手だけで演奏する。

今回の録音では**協奏曲第6番 (BWV1057、プランテンブルク協奏曲第4番からの編曲)**は除外することにした。そのため、次に紹くのは、原曲であるヴァイオリン協奏曲第1番(BWV1041)と同様の厳しさ、莊重さで始まる**協奏曲第7番 (BWV1058)**である。2つのアレグロ楽章の目立つ特徴をなしているのは、鍵盤楽器奏者に極

端な名人芸が求められることで、一方、中間楽章のテンポは、いつものように非常に瞑想的になる。たぶんバッハは、独奏チェンバロにオーケストラの中で主役を与えることを選択した最初の作曲家ではなかっただろうけれども、このジャンルが誕生して以来、バッハは形式を作るだけにとどまらず、その形式に生命を与えることのできる作曲家であることを身をもって証明し続けた。並はずれた技術的な知識によって形式を活性化させたバッハが、その形式の中にあらゆる感情を盛り込んだが、これらはただ芸術の天才のみが、何の説明もなしに、何も介さずに、直接その受け取り手に伝えることのできるものだ。なぜなら、最も神に近い詩は解説する必要はないからであり、その意味でバッハは、音楽は、私たちの感覚に直接語りかけるものであるがゆえに、また、偉大な精神のみが音楽というこの驚異を成し遂げることができるがゆえに、芸術の中で最も高尚なものになり得るということを後世に伝えたのだった。

【マリオ・マルカリーニは1971年ミラノ生まれ。大学時代に歌と音楽学を学ぶ。現イタリアのソニー・ミュージック・レーベル・マネージャーで、アンドレア・バッカッティやパロック・アンサンブル『シーラーテ・ヴェンティ』などの録音の制作を担当している。】

(訳:渡辺 正)

## アンドレア・バッケッティ

1977年、イタリア、ジェノヴァ生まれ。早くから音楽の才能を示し、4歳でピアノを学び始める。ジェノヴァ・バガニーニ音楽院、ザルツブルク・モーツアルテウム、パリ高等音楽院で学ぶ。ザルツブルクでは指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンの目にとまり、貴重なアドバイスを受ける。11歳でミラノにおいてクラウディオ・シモーネ指揮イ・ソリスティ・ヴェネチとの共演でプロ・デビュー。ルドルフ・バウムガルトナー率いるルツェルン祝祭合奏団とは、ルツェルン音楽祭への出演を含むヨーロッパ・ツアを行なう。ルツェルンでは名ピアニスト、ミエチスラフ・ホルショフスキの知己を得、薰陶を受ける。また同じく名ピアニストであるニキタ・マガロフにも称賛を受けた。イモラ音楽アカデミーでのマスタークラスを経て、国内外で本格的な演奏活動を開始。1996年プレミオ・ヴェネツィア・コンクール、2006年ウンベルト・ミケーリ・コンクール入賞。作曲家ルチアーノ・ペリオに認められ、2000年から2001年にかけて作曲者監修のもと、1990年までに作曲されたペリオのピアノ独奏曲全曲をDeccaに録音(2004年発売)。

レパートリーはバッハから20世紀作品まで幅広く、特にバッハのクラヴィーア曲は最も重要なレパートリーであり、中でも「ゴールドベルク変奏曲」を好んで取り上げている。そのほかソロ・リサイタル

ル・協奏曲のレパートリーとしては、ベートーヴェン(ソナタ第1番～第3番・第30番、ピアノ協奏曲第2番・第4番)、モーツアルト(ピアノ協奏曲第4番・第7番・第9番・第11番～13番・第17番・第27番)、メンデルスゾーン(ピアノ協奏曲2曲、華麗なるカプリッショ)、シューマン、ショパン(練習曲全曲、即興曲全曲ほか)、フランク(交響詩『鬼神』、交響的変奏曲)、リスト、ブラームス(作品79・作品116)、グリーグ(ピアノ協奏曲)、スクリャーピン、ラフマニノフ(音の絵、前奏曲集)、プロコフィエフ(ソナタ第4番)、ドビュッシー(喜びの島)、ショスタコーヴィチ(ピアノ協奏曲第1番)、ガーシュウィン(ピアノのための前奏曲)、そしてチマローザからペリオにいたるイタリア人の作曲家によるピアノ作品などがある。

録音にも早くから積極的で、Arts Music(クレメンティ:グラドゥス・アド・バルナスマム、メンデルスゾーン:ピアノ協奏曲第1番、華麗なるカプリッショ、華麗なるロンドほか【ブラハ室内管弦楽団の弾き振り、2004年録音】)、Decca(バッハ:イギリス組曲全曲【2005年録音】、ペリオ:ピアノ独奏曲全曲【2000年～2001年録音】)、Dynamic(バッハ:インヴェンションとシンフォニア全曲、フランス組曲第6番、バルティータ第2番、前奏曲集【以上2008年録音】)、ゴールドベルク変奏曲【2010年11月録音】、トッカータ全曲【2010年10月、12月録音】)、モーツアルト:ピアノ協奏曲第

11番～第13番【ゴールド斯坦指挥バトヴァ・ヴェネート管、2010年録音】)などのレーベルに多数のアルバムを発表しているほか、Arthausからは映像による「ゴールドベルク変奏曲」(2006年ヴィエンツァで収録、ボーナスCDとして2007年サヴォーナでのライヴ録音付き)をリリースしている。

2006年からイタリア・ソニーに録音を開始。RCA Red Sealレーベルには、ケルビーニ(2006年録音)、ガルッピ(2007年)、ベネデット・マルチェッロ(2010年)、ドメニコ・スカルラッティ(2012年)、ヨハン・アドルフ・ハッセ(2014年)とイタリアの作曲家による作品集を手稿譜や筆写譜に基づいて録音するプロジェクトを継続する一方で、2011年にはSony Classicalレーベルに、バッハのクラヴィーア曲の全てを録音する「バッハ・エディション」を開始している。

2005年初来日。2012年にはファビオ・ルイージの推薦でパシフィック・ミュージック・フェスティヴァルに出演し、モーツアルトのピアノ協奏曲第17番と室内楽を演奏、「バッケッティは天才ピアニスト」と絶賛を博す。2014年7月、日本での初のリサイタル・ツアを行なった。

オフィシャル・ホームページ

<http://www.andreabacchetti.net/>

(2016年5月)



## RAI国立交響楽団

1931年、トリノにイタリア最初の国営放送(RAI=Radiotelevisione Italiana)による交響楽団が創設された。その後ローマ、ミラノ、ナポリに同様の国営放送による交響楽団がつくられた。RAI国立交響楽団Orchestra Sinfonica Nazionale della RAIは、1994年に、これらRAI統括の4つのオーケストラがトリノRAI交響楽団を中心に整理・統合されて誕生した。

初代首席指揮者はフランク・シップウェイ。その後2001年からはラファエル・フリューベック・デ・ブ

ルゴスに引き継がれ、2009年からはユライ・ヴァルチュハがその任にあり、2016年10月からはジェームズ・コンロンが首席指揮者に就任することになっている。ヨルジュ・ブレートル、ジュゼッペ・シノーポリ、エリヤフ・インバル、ジェフリー・ティット、ジャナン・ドレア・ノセダらの指揮者とも密接な関係を保っている。

RAI国立響はトリノ・オーディトリアムを本拠地とし、その演奏会はラジオ(Radio3)およびテレビ(Rai1, Rai3, Rai5)で常時放送されており、そこで取り上げられる通常のオーケストラ・レパートリー

のほか、古楽や現代音楽は、イタリア国内外に広く紹介されている。近年ではメータ指揮、ドミンゴ、クーラ、グリゴーロ、マルフィターノ、グヴァザーヴァら世界的な歌手を揃して制作された『トスカ』、『トラヴィアータ』、『リゴレット』の映像が世界的に放映されている。2004年からは同時代音楽を取り上げる音楽祭Rai NuovaMusicaを開催。欧米各地への音楽祭への参加や演奏旅行も多い。

オフィシャル・ホームページ

<http://www.osn.rai.it/>

(2016年5月)





## アンドレア・バッケッティ・ディスクグラフィ

### バッハ・エディション ①



イタリア協奏曲  
～バッケッティ・ブレイズ・バッハ～

DISC 1

〈イタリア様式のバッハ〉

DISC 2

（バッケッティ・ブレイズ・バッハ、  
スカルラッティ、マルチェッロ、  
ガルッピ）

SICC 30167-8

〔録音 2007年、2010年4月、  
2011年3月、2012年9月、2013年4月〕

### バッハ・エディション ②



J.S.バッハ：  
フランス組曲(全曲)

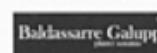
〔ボーナストラック〕

バルティータ 第2番 ハ短調

SICC 30198-9

〔録音 2011年3月〕

### イタリアの作曲家による鍵盤音楽作品集



ガルッピ：ピアノ・ソナタ集(8曲)  
手稿譜に基づく世界初録音

1CD 88697367932(輸入盤)  
〔録音 2007年〕



ベネデット・マルチェッロ：  
ピアノ・ソナタ集(7曲)  
手稿譜に基づく世界初録音

1CD 88697814662(輸入盤)  
〔録音 2010年〕



ドメニコ・スカルラッティ：  
ソナタ集(10曲)\*

ソレール・ソナタ集(4曲)  
\*ヴェネツィア国立マルチーナ  
図書館所蔵の筆写譜に基づく  
世界初録音

1CD:88765417242(輸入盤)  
〔録音 2012年〕



ヨハン・アドルフ・ハッセ：  
ソナタ集

1CD:88883725202(輸入盤)  
〔録音 2014年〕

輸入盤は輸入盤取扱店でお求め下さい。

(2016年5月)

【取り扱い上のご注意】●ディスクは両面共、指纹、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、乾いた柔らかい布で内面から外周に向かって放射状に軽く拭いて下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、油墨、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いてたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、または接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。  
【保管上のご注意】●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

ご購入いただいた商品に関するお問い合わせ：株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント  
〒102-8353 東京都千代田区六番町4番地 phone 03-3515-5111